Video Workshop | Surgery / Proctology

Fri. Nov 20, 2026 2:00 PM - 3:30 PM JST | Fri. Nov 20, 2026 5:00 AM - 6:30 AM UTC | Room 2 (2F Convention Hall 2)
Video Workshop 4 Surgical Treatment of Rectal Prolapse: Indications and Treatment Outcomes 1
Moderator: (Depertment of Gastrointestinal Tract Surgery, Fukushima Medical University School of Medicine)

[VWS4-6] Treatment Strategies and Surgical Selection for Rectal Prolapse: A Comprehensive Approach Incorporating Functional Evaluation and Defecation Guidance

*Goshi Matsuki[1] (1. Center for Pelvic Floor (Functional Disorders and Organ Prolapse), Department of Surgery, Meiwa Hospital)

【目的】 直腸脱はQOLを著しく損なう疾患であり、解剖学的修復と術後の排便機能維持が重要である。本発表では、当院における患者背景と局所所見に基づく術式選択、およびバイオフィードバック（BF）外来や排便習慣指導を併用した周術期管理の現状を報告する。
【対象と成績】 2022年3月から2026年4月までに当院で手術を施行した直腸脱102例を対象とした。術式の内訳は、腹腔鏡下腹側直腸固定術（LVR）77例、Delorme手術18例、腹腔鏡下縫合固定術（LSR）6例、Altemeier手術1例、Wells手術1例であった。
【治療戦略および術式選択】 当院ではLVRを基本術式としている。一方、若年症例に対しては、将来を見据えた異物（メッシュ）留置への抵抗感から、また再発症例において直腸周囲の剥離が著しく困難な場合には、LSRを選択している。さらに、全身麻酔に耐えられない超高齢者や全身状態不良の症例に対しては、低侵襲な会陰式手術（主としてDelorme手術、症例に応じAltemeier手術）を選択し、安全性を担保している。
【機能的アプローチと若年者への対応】 当院の特徴として、解剖学的修復にとどまらず、術前術後のBF外来を通した機能面へのアプローチを重視している。客観的な評価に基づく排便訓練により術後の便失禁や排便困難に対処するとともに、特に若年者に対しては、長期的なQOL維持と将来的な再発予防を見据え、排便習慣の指導を行っている。
【結語】 LVRを基本としつつ、若年者・剥離困難例へのLSR、ハイリスク例への会陰式手術など、症例ごとの柔軟な術式選択が不可欠である。これにBF外来や徹底した排便習慣指導を組み合わせることで、包括的かつ安全な直腸脱治療を実現している。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会